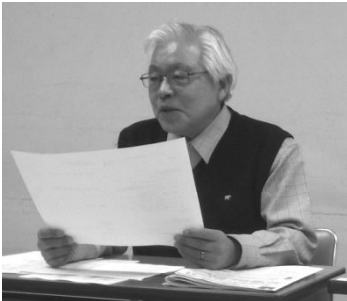


東三河の母なる川・豊川の再生 天然アユ産卵回復プロジェクト

2016年2月14日(日)13:30~16:00 新城文化会館にて「第33回 豊川を守る住民連絡会議定期総会」が開かれ、2016年度の活動中心テーマとして「豊川再生・天然アユ回復プロジェクト」が採択された。豊川上漁協組合長の感覚では天然アユは最盛期に比べて1割にまで減少したという。昨年のアユ遡上は東海地方では好調という報道が多かったが、漁獲としては雨が多かったせいか、厳しいという報道が多かった。

住民会議としては、できることから再生を手掛けるという方針のもとまずは関係者と協力して産卵場整備を行うこととした。



総会は、**連絡会議の渡辺正会長**を議長として2015年度の活動報告、会計報告、2016年度の活動方針、予算が承認された後、本題の天然アユ復活の最初のテーマ「産卵場の整備」の検討に入った。

産卵場の整備方法については水産庁のホームページから公開されている。

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/enoki/pdf/ayu1.pdf>

が適地の河床を耕うん(耕す)して泥を流し、礫の泥を手作業などで洗う。従って、問題は場所の選定と、機械と労力、それに河川管理者・漁協など他の河川利用者の了解。少し規模が大きいと土木重機が必要となるが、費用はだれが負担するのか? 誰が礫を洗うのか? 作業では泥水が発生するが、アユ漁期にあたる漁協の協力は得られるのか?

意見交換の結果、実施計画作成にあたって夏にシンポジウムを開催し課題を整理して確定することとなった。

現状認識として、アユが減少するとともに小型

化している。アユ以外の魚の多様性、数も減少している。豊川の再生(清流を取り戻す)のためには、まずは天然アユの再生をめざす必要があるため、まずできることとして産卵場を再生することとされた。

具体的には昨年ワーキンググループを設け作成した「天然アユ産卵回復プロジェクト」に基づき豊川上流漁協と協力して産卵場整備実施場所・日時など実施計画を作ってお知らせする。既に、河川管理者である国土交通省豊橋河川事務所と協議しており2か所で産卵場造成計画を進めていて秋には実施したい。その期間は産卵が行われる夜間のみ禁漁とする。重機手配は国土交通所からの協力を協議している。礫の泥落とし(タワシ洗い?)は会員、漁協、一般市民の参加を期待するとした。

また、内水面振興法が制定された。住民と共同して環境保全を目指す必要がある。豊川の再生のためにはアユだけでなく雑魚、ザリガニなどの復活が必要。そのためには影響が大きい農薬の使い方など流域農業のあり方、工場排水の改善にも目を向ける必要がある。アユ復活活動を通じて流域住民の意識変革のきっかけとなるのではないか。

結論として、夏のシンポジウムでは以上の観点で課題を整理することとされた。

アユについては庄内川に遡上アユが戻ってきたというような明るい報道とともに、河川流域開発や河川改修の結果減少しているという声もある。

その結果、遊漁料収入に依存する漁協はおしなべて赤字体質という。合わせてアユ釣りをする人が高齢化して将来の釣り人（遊漁料支払い者）維持も問題と聞いた。若い人にとっては衣装、釣り道具、おとりアユ、現場への交通費など結構お金がかかるので敬遠されているということらしい。

河川環境維持は漁協だけでなく流域住民共通の願いであり、河川清掃などを行う団体も多い。河川は多様な植物・魚・昆虫類などの生育の場として、流域住民の大切な地域資源といえる。今回話し合われたような問題は、全国に類例があるが**住民主体で取り組んでいる事例は珍しい**のではないだろうか。こういう産卵場整備の作業例は全国各地にあり、豊川でも一定の効果が期待される。

産卵場整備について（水産庁ホームページより）

